

とっても、あんまり、ちょこっと塾

境界児童

**学校で習う、とっても基本的なことだけど、
試験にあんまりでないのでもみんなが忘れていたりすることや、
知っているとちょこっと得すること、を学ぶ塾**

境界児童

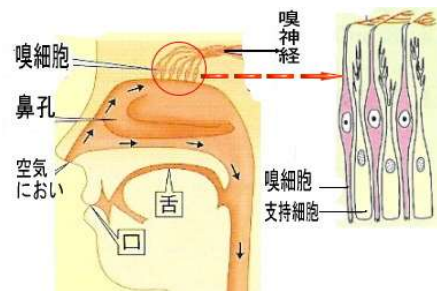
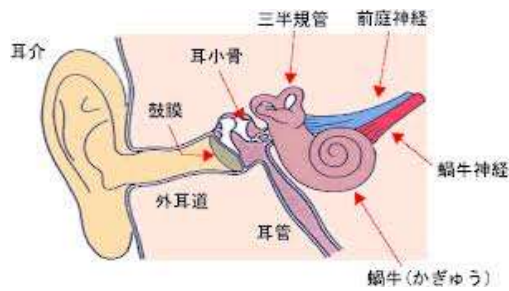
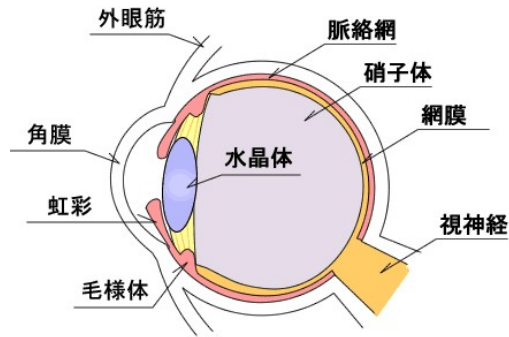
－知能や性格の由来と対応－

1. 知能指数70未満は障害者なので公的支援を受けられます。
2. 知能指数70～84は、学習能力が低いけれど、自立を求められる境界児童。
3. 境界児童が就職した時、期待される完成度まで仕事が達しないことがあります。
4. 皆、多かれ少なかれ生きずらさを感じています。
5. 不運にも軽微な犯罪を犯して警察のお世話になることがあります。刑務所が福祉施設になってしまいます。
6. 生活保護を受けて暮らすことができます。
7. 人間の生物学的背景を理解して、境界児童の尊厳を尊重できる社会を模索することが大切です。

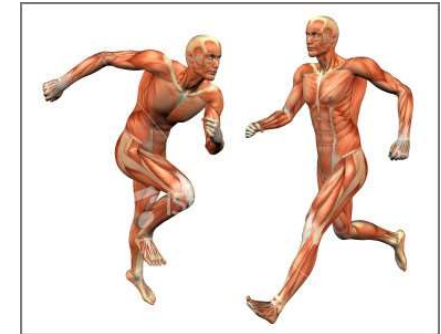
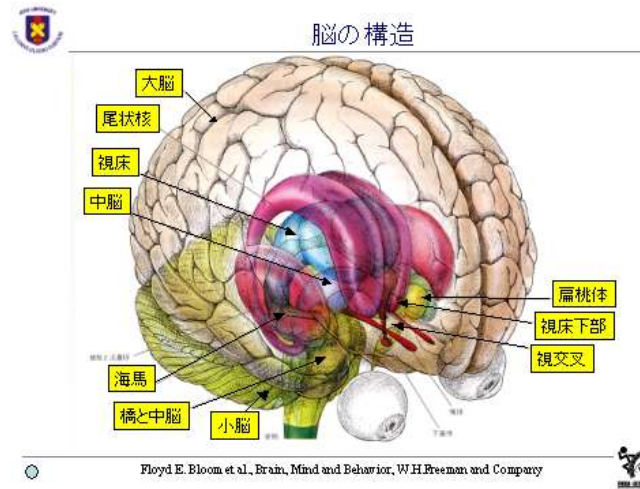
ヒトの能力の生物学的基盤

多様性の起源

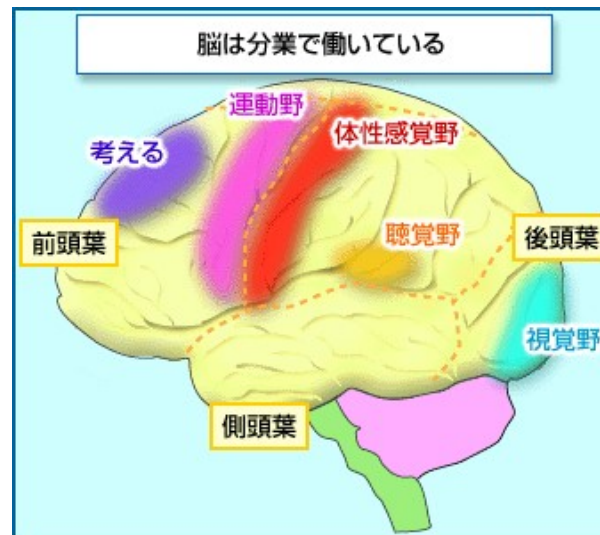
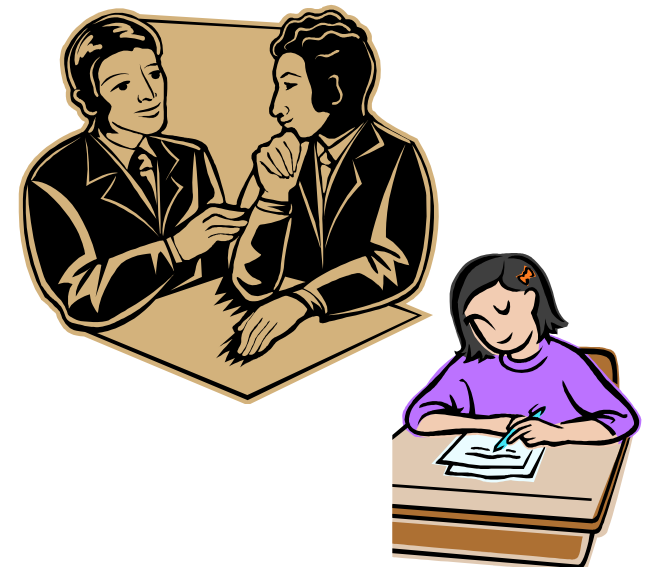
- ・人間の能力は、**刺激の受容能力と中枢神経での情報処理能力と表現能力**の総体である(次ページ図)。
- ・生物学的な能力の違いに加えて、**経験の有無**による神経ネットワークの違いが関与する。



刺激の受容能力



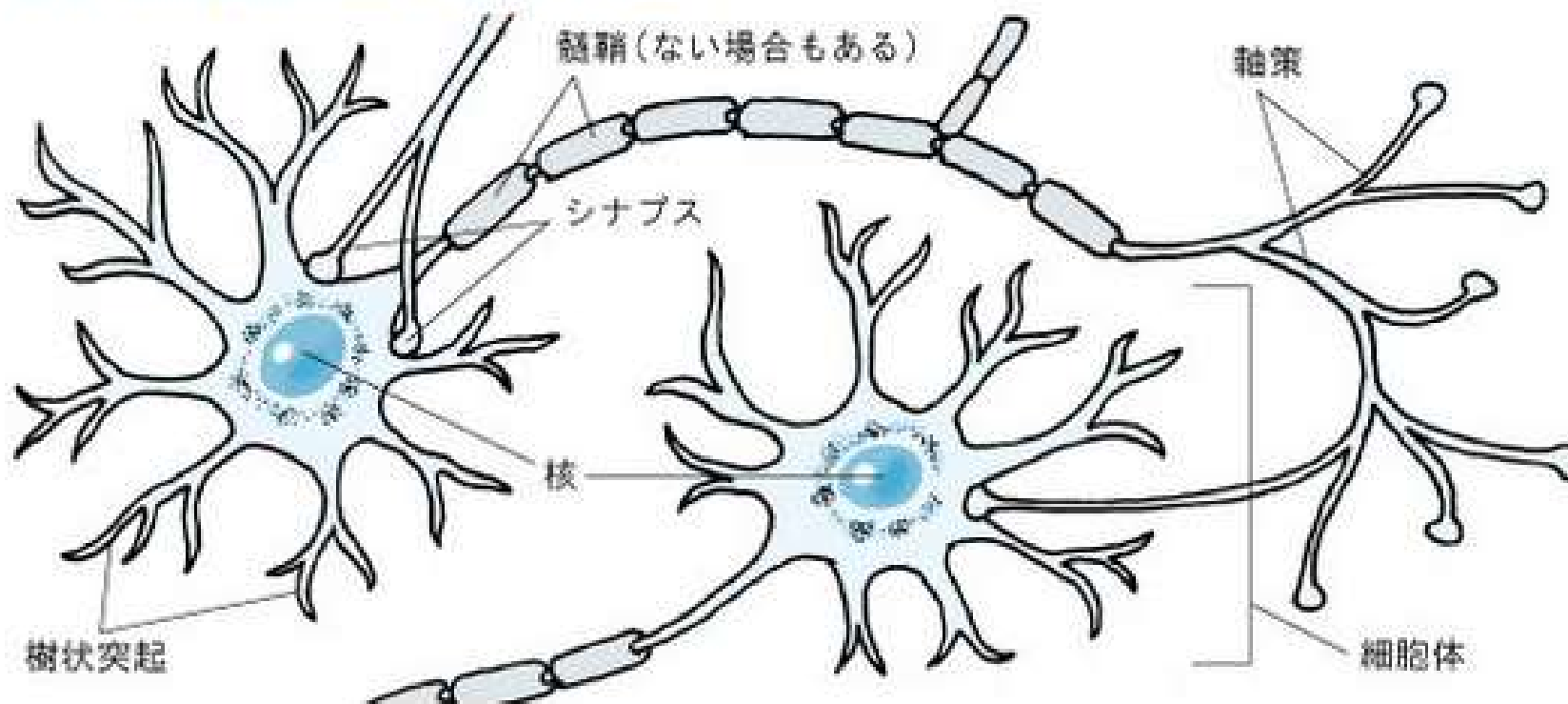
表現能力



個体差の由来

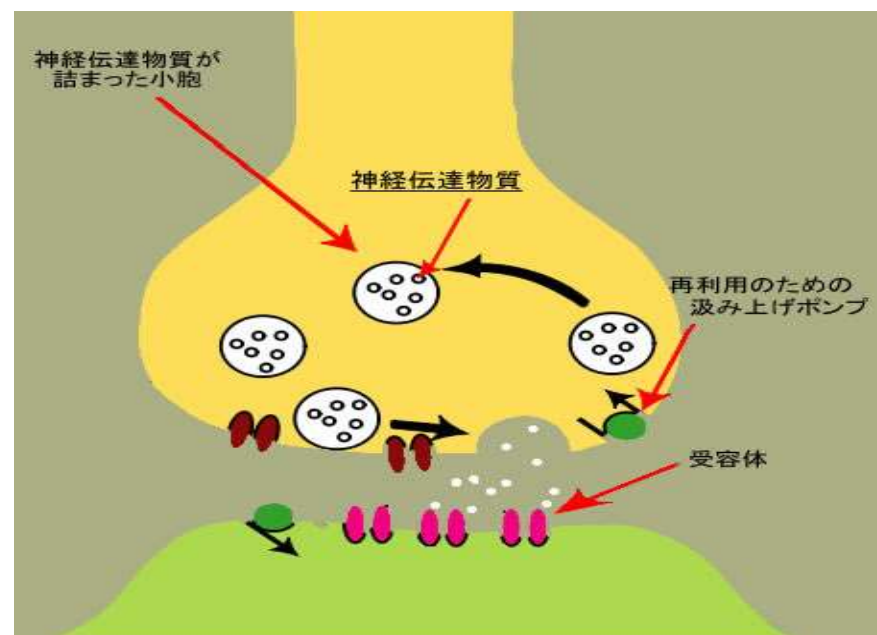
- 目がいい人、耳がいい人、皮膚の感覚が敏感な人、味覚が鈍感な人などがいます。それぞれの刺激の**受容と伝達**の効率が関係しています。
- 目がいい人、耳がいい人、皮膚の感覚が敏感な人、味覚が鈍感な人も、**中枢神経系**の効率によって、脳での情報の強さが違ってきます。
- さらに、脳が感じたことを**行動**に移す効率にも個体差があります。
- 受容機関の目が良くても、脳での処理が遅いと、判断が遅くなります。
- 受容機関の耳が良くても、脳での記憶が長続きしないと、理解が進みません。
- 皮膚の感覚が敏感な人は環境の変化を認識できるけれど、刺激が忍耐力を超えると精神が不安定になります。
- 刺激の受容能力が高くて表現能力が低い人、両方とも高い人、両方とも低い人などがいます。受容器や効果器、神経の働きは集団の中で**正規分布**していると考えられます。
- **先天的な能力の多様性**なので、集団で共有すべき特徴です。

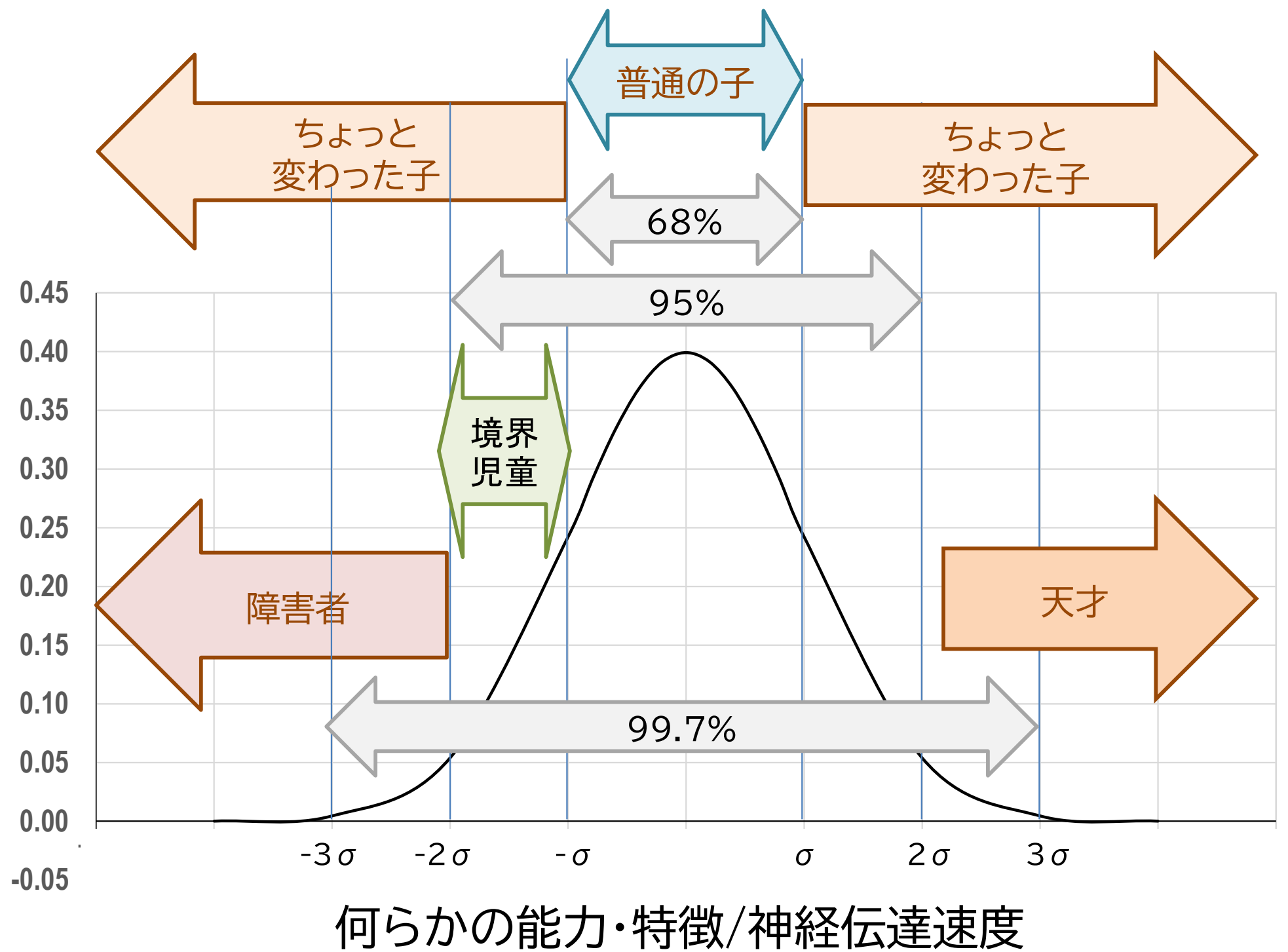
図3 神経細胞（ニューロン）の構造



神経伝導と 神経伝達の 遺伝学的多様性

シナプスの構造





能力・特徴の分布

- グラフの横軸は、個々の刺激の受容能力、中枢神経での情報処理能力、様々な手段での表現能力、そしてそれらの総体としての能力のどれかを選んだ時、集団内でのその人数分布を表します。分布の形は正規分布としています。
- グラフの中の矢印は、知能指数をイメージして、特徴を具体的に表しました。
- 知能指数の分布は正規分布で近似できます。すると、普通の子が68% ($-\sigma \sim +\sigma$ 、知能指数では85~115)、ちょっと変わった子が残りの32%いることになります。
- ちょっと変わった子の中で、知能指数70以下(2.5%)が障害児とされて福祉の対象となります。その中には、能力が低いけれども人に愛される性格をもった子などがいます。
- 知能指数130以上(2.5%)の中には、後々社会を革新する、何かの能力がとて高い、天才と言われる人たちがいます。しかし、その能力の高さゆえに周囲に理解されないことがあります。

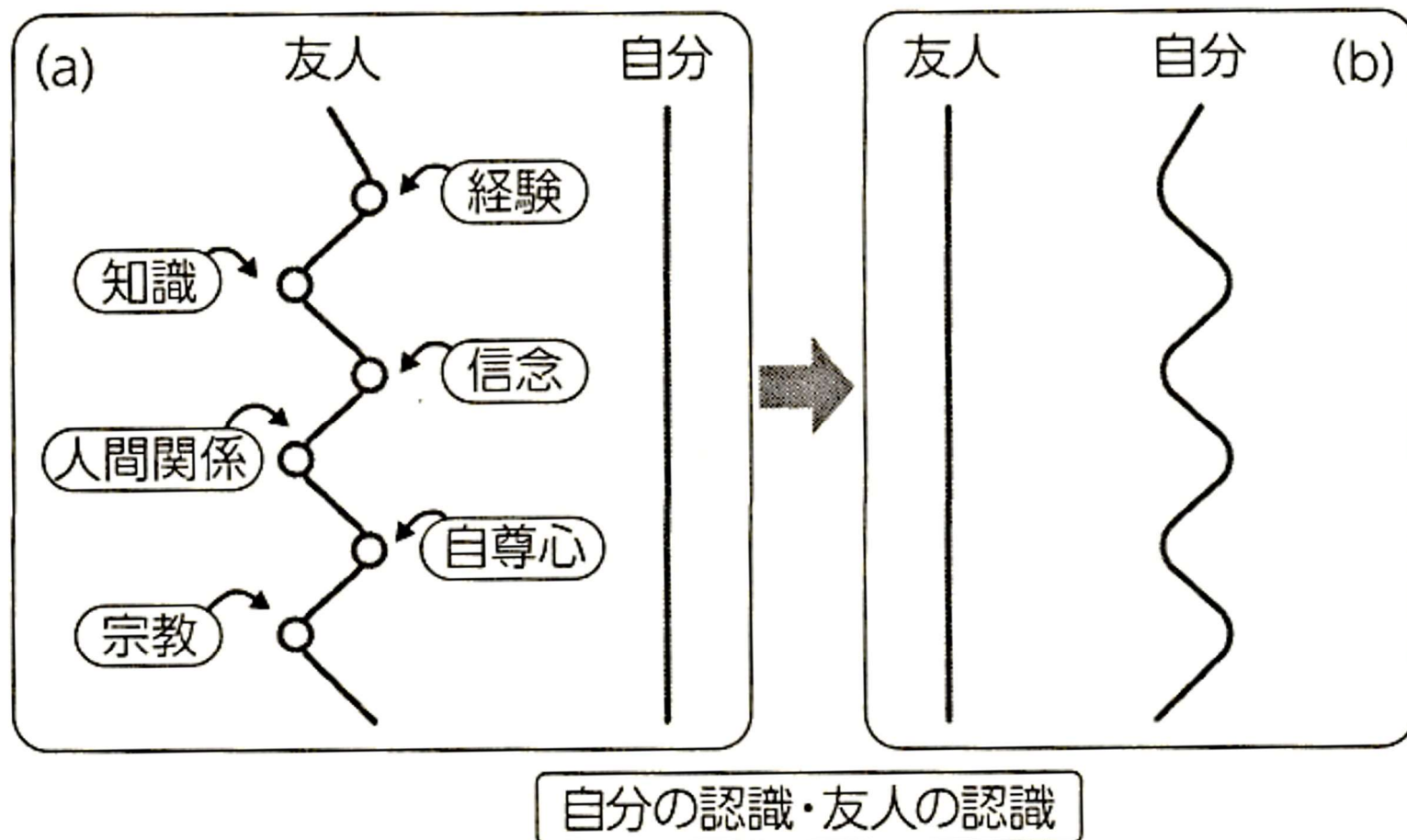
能力・特徴の分布 —境界知能—

- ちょっと変わった子の中のおおよそ15%は、能力が低いのだけれど平均的な人とみなされて自立を求められます。この子どもたちを**境界児童**などと呼びます。
- この能力は、生物学的な背景となっている受容器や効果器の効率、そして神経の伝達速度の相互作用の結果です。加えて、後天的な経験も大きく影響します。多くの場合本人の責任によるものではなく、福祉政策の対象でもないので、**自立に向けた支援が必要です**。
- これらの境界児童や学習障害のある子どもに対して、短所を指摘するのはたやすいことですが、それでは本人の向上心を失わせ、自己肯定感を低下させます。
- 技術や人となりは知能指数では表現できない特徴です。境界児童には、いろいろな観点から、長所を伸ばすような指導が必要となります。

私たちは**自分の考え方は普通**だと考えています。一方で、友人の考え方は、経験や知識や信念によって自分とは違うことがあることに気付きます。

下の図で、私は普通にまっすぐに考えているけれど、友人は思考過程がジグザグです(a)。しかし、**友人からみると、友人は普通**にまっすぐに考えているけれど私はまっすぐではありません(b)。

これがヒトの多様性であり、特に境界児童や際立った特徴をもつ子どもを理解するために留意することです。



時には友人の考え方や行動が容認できないことがあります。

この場合、経験も知識も違うのでやむを得ないこととして、距離を置くことがお互いの心の安心のために必要だと思います。

ちょっと変わった能力・特徴への対処

ちょっと変わった能力・特徴への対処

- 現実的には、独創性に富む人は協調性に欠けることがあったり、大雑把な人は包容力があったり、長所と短所は背中合わせです。ある能力は高いけど別の能力が低いので生きずらさを感じたり、多くの能力は平均的だけどある一つの能力が低いために自立できない人もいたりします。
- 教育心理学は、言動を否定されて育った子供は自己肯定感が低いと教えます。短所の修正を強要するのではなく、長所を伸ばすよう指導することによって、子どもの社会貢献の機会が広げることが大切です。
- 一方で、ちょっと変わった子は、とてもこだわりが強かったり、話題が飛んで会話が成立しなかったり、予想しないところで感情的になったり、約束が守れなかったりして、相手をするととても疲れます。障害を理解しなさいと言われるけれど、自分が理解されないで相手を理解するだけの努力には空しさを感じます。
- そんな子と良い関係を保つためには、自分のストレスが少なくなるよう、自分自身が維持できることを第一に考えながら、相手を否定しないで寄り添うこと、心と体の距離感をとることが必要です。